「暮れる」ということ

——古代詩の時間意識——

小池一郎
京都大學

時間は全てを掩うものではあるが、必ずしも常に時間が意識されるわけではない。ものの變化においてこそ、時間は人間に強く迫つてくる。古代詩にあつては、變化は「暮れる」ということにおいて知覺せられることが多い。そこで、「暮れる」ということが、古代詩で如何なる意味を持つているかを探り、古代人の時間意識の一端を覗つてみたい。

一、日暮れ

詩經においては、詩が一日二十四時間の中の何時に係わるか、が問題とされることが稀である。このことは、詩經の成立事情（特定の人間が特定の時間に創つたものではないということ）が大きく作用していると考えられるが、同時に、詩經の人間が、詩と一日の一定の時間とを關係づけることに疎かつたことにも因るであろう。從つて私がここに扱おうとする「日暮れ」が明白に表現されているのも、二、三ヵ所に限られる。まず、王風君子于役の例。

君子于役　君子役に于(ゆ)く
不知其期　其の期を知らず
曷至哉　曷(いつ)か至らんや
雞棲于塒　雞は塒(ねぐら)に棲む
日之夕矣　日の夕べ
羊牛下來　羊牛の下り來る
君子于役　君子役に于く
如之何勿思　之を如何ぞ思う勿からんや

日暮れは、後代のように自然（特に落日）によつてではなく、日常生活の描寫によつて表わされている。その日暮れ

が、役に行つて歸らぬ夫を偲ばせる。「雞や牛羊でさえ、それぞれ夕刻になれば棲家に歸つてくるのに、私の夫だけは今日も又歸らない。」という思いが呼び起される。次に陳風東門之楊では、

東門之楊　東門の楊
其葉牂牂　其の葉は牂牂たり
昏以爲期　昏を以て期と爲せしに
明星煌煌　明星煌煌たり

今朱注に從うと、昏は逢引きの時を指す。日暮れ時に逢う約束をしておいたのに、相手が現われず、明け方まで待つてしまつた、の意である。以上二篇の日暮れは、いづれもその具體性、現實性において、詩經の全般的な傾向に等しい。又、齊風載驅に「齊子發夕」とあるが、これについては後に觸れる。

詩經の他に古く日暮れを表現しているものの一つに、擊壤歌がある。(1)

日出而作　日出でて作り
日入而息　日入りて息う

「日入」は一日の勞働が終つて休息できる時という意味を持つ。更に漁父歌（吳越春秋）に左の如くある。

日月照照乎寖已馳　日月照照として寖く已に馳す
與子期乎蘆之漪　子と蘆の漪に期せん

日已夕兮　日已に夕べなり
予心憂悲　予が心憂悲す
月已馳兮　月已に馳す
何不渡爲　何ぞ渡ることを爲さざる

これは、漁父に關連づけられてはいるが、元は戀愛歌であろう。そして、日暮れに憂い悲しむのは、逢引きを約束したのに、相手が來ないことに對してである。

以上見たように、日暮れは古くは、何か行爲がなされる

時という、人間生活上の具體的な意味を持つていて、それぞれの場合に、それに應じた特定の感情を人間に呼び起す。日暮れに、抽象的時間の推移が感じられることはない。

楚辭には日暮れの表現が少なくない。まずそれは「夕」の形で認められる。その中でも「朝に～し、夕に～す。」の對偶表現として現われるのが多い。詩經では、例えば「朝夕暇あらず」（小雅何草不黃）や「夙夜公に在り」（召南小星）等のように、「朝夕」や「夙夜」の表現はかなり見られるが、これらは皆、朝と夕が分離していない。[2] 楚辭諸篇の中で、最も古い年代に創られたと考えられるのは、九歌であろうが、そこに、既に次の表現がある。

朝騁騖兮江皐　　朝に江皐を騁騖し
夕弭節兮北渚　　夕に北渚に節を弭う

王逸は「夕を以て衰に喩う。日の夕べ將に暮れんとし、已れ已に衰老するを言う。」としているが、「夕」を以つて「老い」に喩える例は、楚辭諸篇中に見うけられず、ここは、ただ、朝に江皐を出立ち、夕に北渚に宿をとるということであろう。この場合のように、「朝夕」の對偶における「夕」は「旅の宿りの時」を示すのが、楚辭ではむしろ一般である。若干例示すると、

朝馳余馬兮江皐　　朝に余が馬を江皐に馳せ
夕濟兮西澨　　夕に西澨に濟る（九歌湘夫人）

朝發軔於蒼梧兮　　朝に軔を蒼梧に發し
夕余至乎懸圃　　夕に余は懸圃に至る（離騷）

朝發枉陼兮　　朝に枉陼を發して
夕宿辰陽　　夕に辰陽に宿る（九章涉江）

これは楚辭が漂泊の文學としての性格を持つていることと、密接な關係があろう。但し、

朝搴阰之木蘭兮　　朝に阰の木蘭を搴り
夕攬洲之宿莽　　夕に洲の宿莽を攬る（離騷）

のような例は、「旅」とは特に關係がない。又、「夕」は「佳と期して夕に張る」（九歌湘夫人）のように、神と巫との交感の時であり、又、「巫咸將に夕に降らんとす。椒糈を懷きて之を要す」（離騷）のように、神が地上に降りるべき時であつたらしい。

右に見た「夕」は皆、一日の一定の時間帶を示すのみであつて、「移り行く時間」の觀念を內に含んでいないように思われる。日暮れがはつきりと「明より暗へ」の變化の相において捉えられるのは、「日暮」という表現が使われる場合である。そして「暮れる」と言う表現が、人生の暮れ、卽ち「老い」に結びつく。と同時に、「日暮」はやはり「夕」の多くの場合と同じく、「旅の宿りの時」なのである。そうして、例えば次のような表現となる。

進路北次兮　　路を進み北して次る

日昧昧其將暮　　日は昧昧として其れ將に暮れんとす
舒憂娛哀兮　　憂を舒べて哀を娛しましめ
限之以大故　　之を限るに大故を以てせん（九章懷沙）

さて漂泊の旅では、日暮れは行動の停止を强いられる時であり、自らの力の及ばぬ時間が、否應なしに感じられる時である。このことが强く意識されるのは、離騷においてであろう。

欲少留此靈瑣兮　　少しく此の靈瑣に留らんと欲す
日忽忽其將暮　　日は忽忽として其れ將に暮れんとす
吾令羲和弭節兮　　吾は羲和をして節を弭え
望崦嵫而勿迫　　崦嵫を望んで迫る勿ら令む
路曼曼其脩遠兮　　路は曼曼として其れ脩遠たり
吾將上下而求索　　吾將に上下して求索せんとす（離騷）

天帝に謁見せんとして旅立つた離騷の主人公「吾」が靈瑣に留まろうとする時に迫つてくるのが日暮れ（同時に「吾」

の老い）である。「吾」は太陽の進行を止めて、自らの自由を確保しつつ、彼方への求索の旅を續ける。即ち、「吾」にとつて、日暮れは、可能性を己から奪うものとして在る。離騒の世界を創つた人間には、時間は、未來を切り開くものとしてではなく、未來を閉ざすものとして映つたようである。それ故に太陽の進行を止めて、時間を遮斷する。しかるに遮斷は一時のものにすぎない。

日暮れは、又、單なる日暮れ、或いは老年の比喩に止まらず、作者（主人公）の心情が託されるに至る。

時曖曖其將罷兮　　時曖曖として其れ將に罷（く）れんとし
結幽蘭而延佇　　幽蘭を結んで延佇す（離騒）

「時」はこの場合、抽象的時間ではなく、「日」に等しい。(3)「曖曖」とは「昏昧の貌」（王逸）であるが、それは日暮れの擬態語に止まらず、主人公の滅入つてゆく心の様態でもある。日暮れは、主人公の心に不安を呼ぶ。

漢代になると、楚辞に編入されている遠遊、哀時命等の諸篇は別として、日暮れの描寫自體が多くないようである。文選所載の古詩十九首は「時」に關する表現が多く、「推移の悲哀」がその主題と言えるが、(4)日暮れについて觸れるのは、第十六首中の一カ所のみである。そこには、

凛凛歳云暮　　凛凛として歳云（ここ）に暮れ
蝼蛄夕鳴悲　　蝼蛄夕べに鳴き悲しむ
涼風率已厲　　涼風は率（にわか）にして已に厲し
遊子寒無衣　　遊子は寒くして衣無けん

とあり、日暮れが悲哀を呼んでいるようであるが、この詩の「夕」の文字は、文選の一本、玉臺新詠は「多」に作る。この詩は後に「獨宿して長夜を累ね、夢に想いて容の輝けるを見る」とあつて、詩の時は深夜であろう。「夕」は確かに單に日暮れだけでなく、evening（日没から就寝まで）に使われることが多いし、又、この場合その意味なのであろうが、「長夜」と並用されるとぴつたりしないものがあ

る。又、李尤作九曲歌（樂府詩集、藝文類聚等に載せる）の「年歳晩暮にして時已に斜なり」の例はあるものの、漢代では歳暮と日暮が結合されることが稀なことを考え合わせると、「夕」よりも「多」の方がより適わしいように思われる。もし原作が「夕」ならば、歳暮―夕―悲哀という點からみて、新しい傾向を有した詩だと言ってよい。同じく文選の「與蘇武詩」第三首には、日暮れがはっきりとあらわれている。

攜手上河梁　　手を攜えて河梁に上る
遊子暮何之　　遊子暮に何にか之く
徘徊蹊路側　　蹊路の側に徘徊し
悵悵不得辭　　悵悵として辭するを得ず

ここに見られるのは「日暮れの旅立ち」である。楚辭では旅立ちは朝であり、夕は宿りの時であったが、ここでもその觀念は持續されているのであり、それ故にこそ、「暮何之」という疑問形で提示される。卽ち、日暮れの旅立ちは何らかの不正常さを含むのであり、それだけ別離の悲しみが增す。（詩經でもやはり日暮れの旅立ちは不正常である。齊風載驅に「齊子發夕」とあるのは、毛傳に「夕發至旦」と注し、密會に赴く旅である。但し、韓詩では解釋を異にする。(5)）

その他「古八變歌」（樂府詩集他）の

浮雲多暮色　　浮雲暮色多く
似從崦嵫來　　崦嵫より來るに似たり

や、「古詩爲焦仲卿妻作」（樂府詩集他）の

晻晻日欲暝　　晻晻として日暝れんと欲す
愁思出門啼　　愁思して門を出でて啼く

なども、やはり、悲哀へとつながつてゆく日暮れである。

二、歳の暮れ

例えば謝靈運の詩「歳暮」には

殷憂不能寐　殷憂して寐る能わず
苦此夢難頽　此の夢の頽れ難きに苦しむ
明月照積雪　明月は積雪を照らし
朔風勁且哀　朔風は勁く且つ哀し
運往無淹物　運り往きて物を淹むる無く
年逝覺已催　年逝きて已に催すを覺ゆ

とあり、歳の暮れは、時の推移と人間の老いを呼び起すのであるが、古代の人間にとつて、歳の暮れは、必ずしもそのようなものとして現われたのではない。

詩經では歳の暮れもやはり現實生活の中に位置づけられる。まず唐風蟋蟀を見る。

蟋蟀在堂　蟋蟀堂に在り
歳聿其莫　歳聿に其れ莫れん
今我不樂　今我樂しまずんば
日月其除　日月其れ除らん（第一章）

蟋蟀在堂　蟋蟀堂に在り
役車其休　役車其れ休まん
今我不樂　今我樂しまずんば
日月其慆　日月其れ慆ぎん（第三章）

「堂に在る蟋蟀」（自然）が「歳の暮れ」を人の心に喚起する。「今の中に樂しんでおこう。月日の立つのは速いから」ここには歳暮と時の推移が一つのものとして意識されている。が、それは後代の人間のように、歳暮が直接時の推移に繋つてゆくのではない。その間に、農耕生活が介在している。「役車其休」は鄭箋に「庶人役車に乘る。役車休み、農功畢り、事無き也」とある。蟋蟀が堂に入る頃一年の農作業が終り、人はしばしの暇を得る。毛傳・鄭箋に

記す所から考えて、それは九月と十二月に挾まれた數十日。一年一回の、勞働の責務から解放された自由な時。それが、「蟋蟀」の人間にとつての歲の暮れであつた。

同じく詩經の豳風七月は、一般に農事曆文學と見なされる。曆は「循環する時」を前提とする。そして、この循環する時（自然）の上に順調に築かれる人間の營爲。それを理想として歌つたのが「農事曆文學」である。循環する時は、しかし、進歩（歷史）を生まない。從つてこれら農事曆文學には、過ぎ去るものとしての「時」の意識はない。「七月」における「歲の暮れ」はこのような時間意識の中に位置する。今、その中で歲の暮れが觸れられている部分を示すと、

一之日觱發　一の日觱發
二之日栗烈　二の日栗烈
無衣無褐　衣無く褐無くんば
何以卒歲　何を以て歲を卒えん
三之日于耜　三の日于に耜し
四之日舉趾　四の日趾を擧ぐ

又、

十月蟋蟀入我牀下　十月蟋蟀我が牀下に入る
穹窒熏鼠　穹窒して鼠を熏じ
塞向墐戶　向を塞ぎて戶を墐る
嗟我婦子　嗟我が婦子
曰爲改歲　曰に改歲の爲に
入此室處　此の室に入りて處れ

これらの歲の暮れは、日常生活の一環として意識されており、歲が終れば、すぐに、新年が始まり農耕生活が開始される。それは、時の圓環の一部分でしかない。そこに一片の喪失感をも見受けられないのは、蓋し當然であろう。この單純な循環する時間は、最も古い時間意識に屬する。それは、易經に「天の神道を觀るに、しかも四時忒わず」（觀・彖曰）とあるように、天體の運行に相應するものであ

り、かつそれの觀察によつて確かめられるものであつた。

詩經では、別離の情がそのまま時の推移の意識に連なつていく例が少なくない。一例だけ示すと、(6)

瞻彼日月	彼の日月を瞻るに	心之憂矣	心の憂うる
悠悠我思	悠悠たる我が思い	其毒太苦	其の毒太だ苦し
道之云遠	道の云に遠き	念彼共人	彼の共人を念い
曷云能來	曷か云に能く來たらん（邶風雄雉）	涕零如雨	涕零ちて雨の如し
		豈不懷歸	豈歸を懷わざらんや
		畏此罪罟	此の罪罟を畏る

小雅小明では、この別離における時の推移が、歳の暮れに深く意識される。次にその第一章から第三章迄を示す。

1 明明上天	明明たる上天	2 昔我往矣	昔我往く
照臨下土	下土を照臨す	日月方除	日月方に除す
我征徂西	我征きて西に徂き	曷云其還	曷か云に其れ還らん
至于艽野	艽野に至る	歳聿云莫	歳聿に云に莫る
二月初吉	二月初吉	念我獨兮	我が獨りなるを念う
載離寒暑	載ち寒暑を離（ふ）	我事孔庶	我が事孔だ庶し
		心之憂矣	心の憂うる
		憚我不暇	我を憚（いたわ）るに暇あらず
		念彼共人	彼の共人を念い
		睠睠懷顧	睠睠として懷顧す
		豈不懷歸	豈歸を懷わざらんや

畏此譴怒　　此の譴怒を畏る

3 昔我往矣　　昔我往く
日月方奥　　日月方に奥なり
曷云其還　　曷か云に其れ還らん
政事愈蹙　　政事愈々蹙れり
歲聿云莫　　歲聿に云に莫れ
采蕭穫菽　　蕭を采り菽を穫る
心之憂矣　　心の憂うる
自詒伊戚　　自ら伊の戚を詒す
念彼共人　　彼の共人を念い
興言出宿　　興きて言に出でて宿す
豈不懷歸　　豈歸を懷わざらんや
畏此反覆　　此の反覆を畏る

この詩の時を一直線上に並べようとすると、夏暦、周暦等が絡んできて異論が絶えないが、古來の諸説の通觀は省いて、私の見方を略記するに止める。「我」が故郷を立つたのは「日月方に除す」又「日月方に奥かなる」時、恐らく前年の春である。そして西行して、「芃野（毛傳遠荒也）」に至る。以來寒暑を經、艱難に會つたと言うのが第一章、今や歲も晩れて蕭や菽を穫る時節となつたのに一向に歸れそうにもない、と言うのが第二、第三章である。

小明では年の暮れに、時の推移が強く意識されるが、それは單に「永く行役に從つている。そして冬を異郷の地で迎えねばならない」という事實のみから生れてくるものではない。鹽鐵論（前漢桓寛）執務篇に以下の記述がある。

「古は行役時を踰えず。春に行けば、秋に反り、秋に行けば春に來る。寒暑未だ變らず、衣服易えずして、固より已に還る」卽ち、昔、行役には時があつた。行役に限らず、古代には全ての人間の行爲に時があつた。時卽ち opportunity（好機・時機）である。歲の暮れは、行役に行つた者が歸郷すべき時であつた。ところが、未だに歸ることが出來ない。予定のスケジュールから人爲がはみ出た時、「時」が強く意識される。小明では、一般的に歲の暮れが時の推移の悲哀を呼んだわけではなかつた。小雅采薇で「歸らん

と曰い歸らんと曰う。歳亦莫れぬ」と歌つたのも、やはり小明と同じ狀況に在つた人間である。

前述したように、漂泊の旅では日暮れが「行動の停止」の時であるのに對して、歳の暮れは、詩經の例で見たように、農作業の停止の時である。楚辭には日暮れに比して歳の暮れの記述が少ないのは、それが農耕生活に基盤を置いた文學ではないことに原因するであろう。少しく觸れられる楚辭の歳の暮れにしても、具體的な内容を持つものはなく、老いの比喩、或いは老いそのものでしかない。

留靈脩兮憺忘歸　靈脩を留めて憺として歸るを忘れしめん
歳既晏兮孰華予　歳既に晏るれば孰か予を華にせん
（九歌山鬼）
及年歳之未晏兮　年歳の未だ晏からざるに及べ（離騷）
歳忽忽而遒盡兮　歳忽忽として遒盡し

「暮れる」ということ（小池）

恐余壽之弗將　余が壽の將（なが）からざるを恐る（九辯其三）

その他、「招魂」の亂の部分に、

獻歳發春兮　歳を獻（すす）め春を發し
汨吾南征　汨として吾南に征く

とあるが、これは明らかに終つた歳にではなく新春に眼が向いている。又、「遠遊」では

春秋忽其不淹兮　春秋忽として其れ淹まらず

とあつて、王逸は「四時運轉し、往くこと流れの若きなり」と注す。ここでは歳の暮れではなく、四季が、又、九辯其三では、

皇天平分四時兮　皇天は四時を平分するも
竊獨悲此凛秋　竊かに獨り此の凛秋を悲しむ

と、時の圓環の中、秋が特に意識される。又、蟋蟀は詩經では「蟋蟀在堂、歲聿其莫」と年の暮れに續いてゆくが、九辯では、秋を象徴する自然物の一つへと轉化している。

獨申旦而不寐兮　獨り申旦して寐ねられず
哀蟋蟀之宵征　蟋蟀の宵征するを哀しむ（其一）

澹容與而獨倚兮　澹として容與として獨り倚れば
蟋蟀鳴此西堂　蟋蟀此の西堂に鳴く（其三）

ここで悲しまれるのは、秋なのであつて、歲の暮れではない。更に、九辯其七の

四時遞來而卒歲兮　四時遞り來つて歲を卒え
陰陽不可與儷偕　陰陽は與に儷偕す可からず

の卒歲も、特に歲の暮れに重點があるわけではない。この部分は、循環する時間と、直線的時間が並記されていて、螺旋的時間の詩的かつ無意識的な表現とも見なされよう。漢代では、古詩十九首に

思君令人老　君を思えば人をして老いしむ
歲月忽已晚　歲月は忽ちにして晩れぬ（第一首）

四時更變化　四時更ごも變化し
歲暮一何速　歲暮一に何ぞ速やかなる（第十二首）

とあるのは、ただ一般的に時の推移を言う。又、同じく第十六首には、

凛凛歲云暮　凛凛として歲云に暮れ
螻蛄夕鳴悲　螻蛄夕べに鳴き悲しむ

とある。漢代の詩は一體に別離の情を強く歌うが、この詩では（引用は省くが）歲の暮れが個人的な別離の情と一體化している。

いわゆる蘇武詩の一（文選卷二十九、其四）は、特に歲暮

とは直叙しないが、やはり、歳の暮れに呼び起された感情を詠んでいる。

燭燭晨明月　燭燭たり晨明の月
馥馥秋蘭芳　馥馥たり秋蘭の芳
芬馨良夜發　芬馨は良夜に發し
隨風聞我堂　風に隨いて我が堂に聞る
征夫懷遠路　征夫は遠路を懷い
遊子戀故鄉　遊子は故鄉を戀う
寒冬十二月　寒冬十二月
晨起踐嚴霜　晨に起ちて嚴霜を踐む
俯觀江漢流　江漢の流れを俯觀し
仰視浮雲翔　浮雲の翔るを仰視す
良友遠離別　良友遠く離別し
各在天一方　各々天の一方に在り
山海隔中州　山海は中州を隔て
相去悠且長　相去ること悠かにして且つ長し
嘉會難兩遇　嘉會は兩び遇い難し
懽樂殊未央　懽樂は殊に未だ央きず
願君崇令德　願わくは君令德を崇くし
隨時愛景光　時に隨いて景光を愛せよ

この詩は、全篇友を送る際の作とされるが、恐らく、はじめ六句は、かつて秋の早朝に友と別れた時のことを想い出しているのであり、後の部分は十二月の早朝、獨りその友を懷つている、と解すべきであろう。李善が「秋月既に明るく、秋蘭又馥る。遊子時に感じて彌々本を戀うを增すなり。」というのは、秋を明言するのであり、時は寒冬、嚴霜と同一だとは考えられない。又、征夫・遊子と並記されているところから、その一人は作者自身だとも考えられる。そうすると、これは、旅先での離別、或いは二人とも旅立つ時の詩ということになる。この詩では、十二月が別離の情を濃くしているのだが、それは、「踐嚴霜」という冬の寒さが、獨り流浪することのきびしさを膚身に感じさせ、友を懷わせるのであろう。この詩に限つて言えば、「推移する時」の意識は薄いようである。

三、老　い

「暮れる」とは明より暗への移行だとすると、人間の場合、それは「老い」の姿をとる。

詩經の、とりわけ國風の、多くの詩篇は、對人間の關係において發せられた聲であり、「何人にも呼びかけることを自ら拒絶した孤獨者の獨語」は少ない。(7) それは「老い」についても言えることを端的に示しているのが、「偕老」という表現である。

興子偕老　子と偕に老いん
（鄘風君子偕老）（鄭風女曰雞鳴）（邶風擊鼓）

及爾偕老　爾と偕に老いん（唐風扈）

又、「偕老」と似た表現に、

德音莫違　德音の違う莫くば
及爾同死　爾と死を同じくせん（邶風谷風）

邂逅相遇　邂逅して相い遇わば
興子偕臧　子と偕に臧からん（鄭風野有蔓草）

之死矢靡他　死に之るまで矢いて他は靡し（鄘風柏舟）

右は皆「末永く愛する人と生活したい」の意で、「老」「死」は「臧（善）」と同一地平にあり、暗いイメージや悲しみを伴なわない。

唐風葛生は、小序に「晉の獻公を刺る也。攻戰を好み、則ち國人喪多し」と記し、悼惜の詩であると考えられる。「老」に限って言えば、

夏之日　夏の日
冬之夜　冬の夜
百歲之後　百歲の後
歸于其居　其の居に歸せん

とあり、作者（妻）が夫と死別してから、自らが死ぬまでの期間が非常に永く感じられている。それは、死ぬことによつて、夫と魂の合一が出來るという期待がある爲である。この考え方は王風大車に一層明らかである。

穀則異室　　穀きては則ち室を異にするも
死則同穴　　死しては則ち穴を同じくせん

毛傳は「室に生くれば則ち外と內と異なり、死すれば則ち神合同して一と爲る也」と注す。そのような死の前に來るべき老いは、ただ耐え忍ぶ他ない。ここで展開される心理は、光陰矢の如しという時間意識とはむしろ逆のものである。「愛する人と一緒になる」ことへの期待が、老いへの恐れを寄せつけないのは、「偕老」の場合と同様である。

以上が詩經における老いの意識の一側面であり、これを老いに對するプラスの評價だとすると、詩經は又、老いに對するマイナスの評價をも持つ。鄭風氓では「及爾偕老」という喜ばしい未來像が、現實には相手の人間の裏切りによつて崩れ去る樣が述べられる。

及爾偕老　　爾と偕に老いんとせしに
老使我怨　　老いては我をして怨みあらしむ

又、秦風車鄰では、

今者不樂　　今樂しまずんば
逝者其耋　　逝くゆく其れ耋いん

と、老いの內實は觸れられないが、それは、忌むべきものとして在る。又、小雅小弁では、

維憂用老　　維れ憂いて用つて老ゆ

と、自然に訪れる老いではなく、憂いによつてもたらされる老いが嘆かれる。ただ、詩經では、老いが、否定的なものとして受けとられることはあつても、明白な恐怖の念、

悲しみの情とともに表現されるまでには到つていない。老いが未來のこととしてあり、或いは十分に重みを持たぬということは、詩經が本質的に老いを知らざる者の文學、青春の文學であることを示していると思う。

それに比して、楚辭は老いの文學と言えようが、それは廣く老いを意識した文學という意味であつて、必ずしも老人の文學なのではない。そして、各篇によつて老いの色合いは異なる。九歌山鬼には、

留靈脩兮憺忘歸　靈脩を留めて憺として歸るを忘れしめん
歲既晏兮孰華予　歲既に晏るれば孰か予を華にせん

とある。これは、老いそれ自體が嘆かれるというよりもむしろ、老いによつて引き起される憂慮すべき事態が危惧される。大司命は「神に壽命を乞う」內容であるが、その中で老いそのものが問題にされるのは、

老冉冉兮既極　老は冉冉として既に極まる
不寖近兮愈疏　寖く近づかずして愈々疏し

の部分である。ここでの嘆きの對象は老い自體よりも、相手（神）の自らに對する態度である。そして結局「固より人命は當る有り」と壽命の如何ともしがたいことが述べられる。

離騷では老いは重要な意味を持つてくる。まず、老いが直接表明される部分を抜粹する。

汩余若將不及兮　汩として余將に及ばざらんとするが若くし
恐年歲之不吾與　年歲の吾と與にせざるを恐る

日月忽其不淹兮　日月忽として淹まらず
春與秋其代序　春と秋と其れ代序す
惟草木之零落兮　草木の零落を惟い
恐美人之遲暮　美人の遲暮を恐る

老冉冉其將至兮　老は冉冉として其れ將に至らんとし
恐脩名之不立　脩名の立たざるを恐る

及年歲之未晏兮　年歲の未だ晏からず
時亦猶其未央　時も亦猶お其れ未だ央きざるに及べ

己の在り様はこうだ、と明らかに見究める、卽ちあきらめた時から眞に老いがはじまる。離騷はそのような老いへの抵抗の世界だと考えられる。離騷の主人公「吾」は、「時は繽紛として其れ變易す」「朕が時の當らざるを悲しむ」「世は溷濁として分れず」という時代意識を所有しながらも、黨人等に遮られて、自らは無爲の中に老いんとしている。「吾」はそのような己をあきらめきれない。そこには、老い・あきらめに抗する人間の主體性がある。漢賈誼が弔屈原賦で、「般として紛紛として其れ此の尤に離る、亦た夫子の辜なり」とするのも、故の無いことではない。とするならば、離騷には老いについての記述が少なくないけれども、それは主人公（又、作者）の不安と焦燥感を表わしこそすれ、彼自らが老いてしまつたことを示すのではないであろう。離騷の老いは、「將に至らんとする」老いである。離騷の時間は、先にも觸れたが、人間から可能性を奪うものでしかない。その時間への恐怖が、そこには在る。

このことは、九章における老いを檢討してみれば、瞭然としてくる。まず、涉江の例。

年既老而不衰　年既に老いて衰えず
固將愁苦而終窮　固より將に愁苦して終窮せんとす

固將重昏而終身　固より將に重昏して身を終えんとす

これらは皆、「既に老いしもの」の言葉である。あきらめがある。世の亂れが觸れられぬではない。例えば「陰陽位を易え、時當らず」。しかし、涉江の人間はもはや周圍の人間に對して憎しみを抱かない。

與前世而皆然兮　　前世と皆然り
吾又何怨乎今之人　　吾又何ぞ今の人を怨まんや

老いは既に、過程ではなく、終末と化している。この點、老いを迎えつつある離騷の世界の方が、より深く時間の影に掩われていると言えよう。次に、懷沙では、

進路北次兮　　路を進み北して次す
日昧昧其將暮　　日は昧昧として其れ將に暮れんとす
舒憂娛哀兮　　憂を舒べ哀しみを娛しましめ
限之以大故　　之を限るに大故を以てせん

知死不可讓　　死の讓る可からざるを知る
願勿愛兮　　願わくは愛(おし)む勿からん

老いは死に向つている。又、悲回風では、

歲忽忽其若頹兮　　歲は忽忽として其れ頹(すた)るる若く
時亦冉冉而將至　　時も亦冉冉として將に至らんとす
寧逝死而流亡兮　　寧ろ逝死して流亡せん
不忍爲此之常愁　　此の常愁を爲すに忍びず

既に終末の予感が強い。これは屈原傳說或いはその源流の影響を既に受けているが爲でもあろう。次の「惜往日」は老いよりもむしろ死に傾斜した作品である。

卒沒身而絕名兮　　卒に身を沒して名を絕たん
恬死亡而不聊　　死亡に恬(やすん)じて聊せず
或忠信而死節　　或は忠信にして節に死す
寧溘死而流亡兮　　寧ろ溘(こう)死して流亡せん

死は絕望の度がより濃いのかも知れない。が、このように

はつきりと、死を必然のこととして未來に据えてしまつた文學は、もはやその生命を失なつているのではあるまいか。

宋玉の作とされる九辯は、あきらめの感をいつそう深化させて、それを作品に定着させている。

惟其紛糅而將落兮　其れ紛糅して將に落ちんとするを惟い
恨其失時而無當　其の時を失うて當る無きを恨む（其三）

悼余生之不時兮　余が生の時ならずして
逢此世之征攘　此の世の征攘に逢うを悼む（其三）

泊莽莽與野草同死　泊として莽莽として野草と同じく死す（其六）

春秋逴逴而日高　春秋は逴逴として日に高く
然惆悵而自悲　然く惆悵として自ら悲しむ（其七）

歲忽忽而遒盡兮　歲忽忽として遒盡し
老冉冉而愈弛　老は冉冉として愈〻弛む（其七）

年洋洋以日往兮　年は洋洋として以て日に往き
老嵺廓而無處　老は嵺廓として處る無し（其七）

生天地之若過兮　天地に生じて過ぐるが若く
功不成而無效　功成らずして效なし（其九）

九辯では、亂世に對して、己の無爲に對して、ただ「自ら悲しむ」のみである。「恨」「失時」「自悲」「愈弛」「嵺廓」「無處」「無效」皆、楚辭の中では、九辯にのみ見られるか、或いは九辯に源を發する表現である。あきらめきつた、老いてしまつた精神は、感傷に生きる。秋、風景が表面に出てくる所以である。

楚辭の世界は、詩經のように死後の魂合一を信ずることもなく、莊子の「物と春を爲す」といつた時間超越とも無緣である。又、佛教におけるような宗教的救濟をも知らな

かつた。離騷の主人公は終に救われず、九辯に至つてはただ「自悲」することに慰みを見い出した。楚辭の人間は、結局、時間に苦しめられつづけた。

自悲することなく、「あきらめの原理」を考案して、逃避の方向にはつきりと進んだのが漢代の文學（詩）である。推移を最も冷酷に人間に知らしめる老いが、古詩十九首の人間を絶えず苦しめたことは、詳述するまでもあるまい。ただ、古詩十九首の老いに特徴的なことは、そこに何らかの抜け路が設けられていることである。例えば、

何不策高足　何ぞ高足に策うち
先據要路津　先ず要路の津に據らざる（第四首）

榮名以爲寶　榮名以て寶と爲さん（第十一首）

不如飲美酒　如かず、美酒を飲み
被服紈與素　紈と素とを被服せんには（第十三首）

漢代の詩人のある部分は、自ら憐れむことの無益なことを知り、苦痛からの脱出を志向する。けれども、そのことは、彼らが終に、苦痛から抜け出ることが出來なかつたことの證左であることは、次の表現からも察せられる。

無爲守窮賤　爲す無かれ、窮賤を守り
轗軻長苦辛　轗軻して長く苦辛するを（第四首）

立身苦不早　身を立つること早からざるを苦しむ
（第十一首）

又、第十三首にしても、

下有陳死人　下に陳死の人有り
杳杳卽長暮　杳杳として長暮に卽く
潛寐黃泉下　潛に黃泉の下に寐ね
千載永不寤　千載永く寤めず

と、死を深く意識した人間の言葉として考える必要がある。

單なる快樂主義者の言ではない。詩經・楚辭の人間は、苦痛を直截に表明し得た。しかるに、漢代の詩人の少なくともある部分は、己の苦痛を表現するに、屈折した手段を用い始めたようである。彼らは、自ら決して獲得できぬ、又、現に自ら喪失したものへの期待・願望を述べることによって、自らの絶望の度を深めていつたのではあるまいか。私は、このことと、古詩十九首をはじめとして漢代の詩は、社會の在り様を批判する姿勢をほとんど持たないこととの相關關係を探り當てたく思うが、その爲には、司馬遷をして「天道是か非か」と言わしめた漢帝國の構造に思いを致す必要があろう。

〔注〕

(1) 古くは、後漢王充・論衡（感虛篇）に見える。

(2) 「朝夕」の他の例を擧げる。小雅雨無正「莫肯朝夕」、小雅北山「朝夕從事」、商頌那「溫恭朝夕」。「夙夜」の例は更に多い。

(3) D. Hawkes 氏は The day と英譯する。陳世驤氏は「論詩・屈賦發微」にて「那悲劇性的詩人屈原，……，完完全全地把那無休無止・變動不居的『時間』的概念，用『時』字具現出来。」としている。が、所謂屈原作とされる九歌・離騷・九章等における「時」の字は、全て、抽象的時間（time）ではなく、何か具体的意味を持った「時」のようである。time はむしろ「日月忽其不淹兮」などの表現をとる。例えば、九章悲回風の「時亦冉冉而將至」の時は、一見抽象的時間のようだが、冉冉は、楚辭では老いの形容としてのみ用いられるのであって、この場合は、「老い」或いは「壽命」の譯語が適当であろう。D. Hawkes 氏は、この部分を、"And *my time* draws gradually nearer." と譯している。

(4) 吉川幸次郎博士「推移の悲哀—古詩十九首の主題—」參照。（中國文學報第十、十二、十四册）

(5) 釋文に「發韓詩云發旦也」と記す。卽ち「發夕」で、その場合、「朝夕樂しむ」といつた意となろう。

(6) 他の例。王風君子于役「君子于役、不知其期、曷至哉」、王風揚之水「懷哉懷哉、曷月予還歸哉」。

(7) 吉川幸次郎博士「詩經國風」（中國詩人選集）の「あとがき」。